健康生活と看護学研究　4・5：24–40（2022）

〔依頼原稿〕　研究ノート

これからの地域で主体的に生きる看護専門職の創出
－基礎科目「愛媛を学ぶ」の内容構成の狙いと背景－

森賀盾雄

人間環境大学アカデミックアドバイザー
松山看護学部非常勤講師

［要旨］
本研究は，基礎科目「愛媛を学ぶ」の講義内容において「地域で主体的に生きる」看護専門職を創出する今日的意義を明らかにすることである．筆者は50年間，地域で主体的に生きることを追究し，実践と理論活動を続けてきた．筆者の過去をリフレクションして考察し，授業内容にいかに反映させているかを明確にしつつ論じる．今日の社会は伸縮自在の地域との関わりで，自己の存在位置を確認しながら，制度によって限りなく分断された地域住民を包括的統合主体として捉えながら，地域再生を行う場，多様な主体が知的で，居心地の良い場を自発的につくることが求められている．本稿では松山看護学部の卒業時到達目標として掲げている地域貢献の出来る臨床適応能力すなわち人間力形成のために「部分化，人工物，経済主義，環境負荷増大」というまさに近代が追い求めた方向を反転し，他者とのケアから主体的に生きる物語を紡ぎ出し地域に関わっていくことの重要性を明らかにした．

キーワード：地域，主体，生きる，ケア，統合的理解，包括的理解，暗黙知，分析科学，知覚と観察，地域再生

緒　　言

授業科目「愛媛を学ぶ」は2017年度松山看護学部創設以来，選択基礎科目として１年次前期に講義して５年目を終了した．３コマを俳都松山らしく俳句講義，あとの12コマを私が講義してきた．５年間の講義を振り返りつつ，この科目における私なりの講義内容に込めた思いと考え方を私の個人史的リフレクションを含めて考察することとする．

毎年度のシラバス作成から講義の準備，講義，試験，評価を経て，絶えず改良を重ねながらの考察である．

「愛媛を学ぶ」ということは，学生に愛媛の自然・歴史・文化等のガイダンス的講義であるならば，長年にわたり愛媛に住んで愛媛の様々な事象を見分・思考してきた私としては，それほど難しいことではない．しかし，それらのガイダンス的講義を表層として，受講学生の主体形成なかんずく「地域と切り結んで，看護専門職として，これからどのように生きていくのか」という課題を血脈として講義全般に網の目のように流し，受講生が講義終了時点で，近い将来，実習先で，はたまた卒業後に看護専門職として地域に主体的にかかわる方向性を少しなりとも獲得できればと考えると，科目内容の構成は一転して難しくなるのである．ゆえに，この５年間はその試行錯誤の連続であった．ただし，地域に主体的にかかわることが求められているのは看護専門職だけではない．地域にかかわる全ての人なのである．

基礎科目「愛媛に学ぶ」に期待されたことは，当初は全国から集まる学生に大学生活を送る愛媛で学生が愛媛と関わるケースに正しく対応できることや実習に赴く愛媛県内の医療機関などにスムースに適応できることなどではなかったのか．

ただ，ここにきて地域医療・保健をとりまく情勢は急激な高齢化の進展を背景として，医療・保健従事者により密接な地域対応を要請してきている．2014（平成26）年６月に成立した「医療介護総合確保推進法」により「地域医療構想」が制度化され，地域包括支援の推進がなされてきた．科目「愛媛を学ぶ」も看護専門職を目指す学生たちに地域情報をガイダンス的に提供すれば事足れりではなく，その地域情報は学生たちが，現在から将来にかけて所属組織と生活に関連する地域で，より積極的に地域と関わるための内容を具えていなければならない．ただ，地域は地域医療構想や地域包括支援の整備以前から当然ながら存在しており，過疎地の診療所などが地域医療を担ってきたのである．2025年問題を背景とした地域医療福祉への国民的要請が基礎科目「愛媛を学ぶ」の中に当初から内在化させていた「地域と切り結んで，看護専門職として，これからどのように生きていくのか」に追いついてしまったのである．しかし，注意しなければならないのは看護専門職の活動領域が地域における多様な場に拡大してきているから看護学部生たちに地域で主体的に生きることの重要性を教える必要性があ

るということではない．地域に拡大しようがしまいが地域社会で主体的に生きるのは元々すべての人に必要だからである．その前提をまずは押さえておかなくてはならない．そのうえで看護専門職としてより重要性が増してきたということである．

学生たちが現在所属する大学，将来所属する医療・保健機関は「社会とコミュニティの機関」であるならば，社会とコミュニティが求める「地域はもちろん世界でも通用する看護のスペシャリストの養成」に応えなければならない．目指すは「看護師自らが考え行動し，地域で適切な行為を実践できる人材」である．そのために，「愛媛を学ぶ」の講義で，地域と切り結び，地域との関連で主体的にいかに生きるかを受講学生に汲み取ってもらいたいのである．

本研究ノートでは，第１章で「地域で主体的に生きる」という点に講義内容をシフトさせてきていることを，第２章，第３章，第４章で筆者自身がこの50年間「地域で主体的に生きてきた」経過をリフレクションし，第５章でその経過から「地域で主体的に生きる」ということがどういうことなのかを考察し，さらに第６章で「地域で主体的に生きる看護専門職の創出」を考察し，結語に向かうこととする．

本論に入る前に私の「主体的に生きる」という概念を示しておく．「主体的に生きるとは，自らをコントロール（Self-Control）しながら自らが属する組織と社会に自らの意思で行動し責任を果たすこと．」であり，決して自由気ままな行為ではない．

第1章　「地域で主体的に生きる」重視への講義内容シフト

受講学生は2017年度８名，2018年度８名，2019年度７名，2020年度13名，2021年度８名であり，2017年の初年度と2021年度のシラバスの構成を比較してみてみよう．

2017年度のシラバスの「講義目的」は「(1) 俳句王国とも称される愛媛の俳句文芸の歴史を学ぶこと．俳句とはなにかを知り，俳句の作り方を学ぶこと．(2) 愛媛県及び松山市という地域を，文化，歴史，産業，風土，文学，観光資源など多様な切り口から学ぶ．(3) 本学部に学ぶ学生一人ひとりが愛媛県についての総合的な理解を深め，特に「おせったい」の文化と精神，人と人とのつながりの大切さを会得する．(4) 東予，中予，南予の３つの地区に分かれ，多くの島嶼部と山間部地域を含む愛媛県は，非常に多様性に富む地域である．その愛媛県について様々な側面から学ぶことで，将来看護職として従事する際に，保健医療や健康面を通じた地域貢献，地域連携につながるような知見や知識を，本講義を通じて涵養する．」としていた．

しかし，2021年度シラバスの「科目の目的」は「私たちは誰しも地域と離れては生きられない．本科目を受講する学生は愛媛県で過ごして学んでいる．また，学生たちは将来，愛媛県内もしくは日本の何処か，はたまた海外の何処かで仕事や生活をする．生涯にわたり地域と付き合うということは，地域のこと，地域と自分との関り，及び関わり方を学び続けなければならない．愛媛県で学ぶ学生たちゆえに，地域として比較的身近に認識できる愛媛を素材として取り上げる．ただし，『愛媛を学ぶ』といえども，愛媛の課題は日本と世界の課題と密接に結びついている．地域というものは伸縮自在のエリアを設定できる．地域と受講学生との関わり方，在学中においても実習や生活で，看護関連職種に就く将来においても，地域と職場との関連で，また地域の中で主体的に生きていくための素養が求められ

表①　講義項目（コマ）比較

コマ	2017年度	2021年度
①	俳句の歴史俳句の基本を学ぶ	地域とは-世界の中心で愛を叫ぶとは-
②	俳句の実作と添削	俳句とは
③	句会の体験俳句の滑稽について学ぶ	俳句実作と俳句アート制作
④	地域とは	句会をしよう
⑤	愛媛とは	日本の中の四国、そして愛媛
⑥	愛媛県の歴史	災害列島の中の愛媛-観測史上最大被害の台風1899年-
⑦	愛媛県の産業Ⅰ農林水産業	柑橘・真珠王国愛媛の展開
⑧	愛媛県の産業Ⅱ商工業	工業都市四都物語-今治・西条・新居浜・四国中央市-
⑨	愛媛県の産業Ⅲ観光	地域創生のための地域を考える
⑩	愛媛県の二都物語Ⅰ川之江・伊予三島	地域再生に挑む人たち-山岡ヒロミと宮部元治の場合-
⑪	愛媛県の二都物語Ⅱ八幡浜・宇和島	地域再生に挑む人たち-森智子と山下由美の場合-
⑫	人口減少時代の愛媛の地域	四国・愛媛の道と四国遍路
⑬	子規と漱石の松山	包括的動的に見る地域
⑭	四国遍路の愛媛	「個の主体復権」と地域
⑮	地域再生に挑む愛媛の人たち	地域づくりのプラットホーム

る．すなわち，本科目は，愛媛を素材とした地域学を学ぶことを目的としている．」と修正変更した．

表①のコマ比較表に提示しているように，2021年度シラバスでは「地域で主体的に生きる」ことをより強く打ち出した内容に洗練させ，コマとコマの関連性，コマと全体の関連性を「地域に主体的に生きる」ことでの連携をより密接にしている．

いずれのシラバスでも「地域で主体的に生きる」素養を身につけることを目的としていることはかわらない．ただ違いといえば，2017年シラバスよりも2021年シラバスの方がより鮮明・明確化し，その目的への方向性を意識的に強めていることである．比較表を見れば，直接に「地域で主体的に生きる」コマを2017年度は15コマ目だけであったのが2021年度は9・10・11・13・14・15コマの６コマに増やしている．さらに俳句の講義を2017年度には１コマ目から３コマ目であったのを2021年度には２コマ目から４コマ目に変更し，１コマ目に「地域とは」をもってきた．これは最初の授業の１コマ目で15コマ全体を概説することと受講学生にとって地域はいつでも自らが何らかの関わりをもって生きるための対象概念だということを最初に理解してもらうためである．

第2章　筆者が地域で主体的に生きた実践リフレクション ―自治体職員時代―

私の地域づくり実践と「地域で主体的に生きる」理論の追究の始まりは1972年にさかのぼり，今日まで50年の長きにわたっている．当初は無意識的に，やがては意識的に．それはいつもドラッカーのいう「自らの組織が社会に与えるインパクトを処理すると共に，社会の問題の解決に貢献する（P.F ドラッカー，1973）」というマネジメントの「組織に対する固有の役割」と「地域や社会に対する役割」を実践，考察，さらに実践，考察の連続であったといえる．

1972年に愛媛県新居浜市職員になった当初から，地域社会を包括的に開かれた地域として静止地理学的でなく動態地理学的に捉えたい，それも地域に生きる人々の生活実感を伴いながら捉えたいと考え，最初の13年間は業務とは別に自治体自主研活動を間断なく展開していった．「新居浜地域問題研究会」「発達心理学研究会」「施設問題研究会」「都市問題学習会」「新居浜地域経済構想研究会」「パソコン自主研修グループ」などを市職員仲間に呼びかけて組織して活動した．基本アフターファイブの学習会であり，市行政の統制を排除して自由闊達な議論が出来るように努めた．いきなり地域に入っての公害調査や人物ヒアリングなどもしばしば行った．1976年には，眼前の石油化学コンビナートを眺めながら「閉じこめられ，眠り込まされてきた自治の息吹を生活者にとりかえすべく，新居浜のコンビナートという壁は私たちに，人間的に燃える私たちの地域社会論を要求しているのではなかろうか」と自主研機関誌に書き，1985年には「自己の内面まで市民を受け止めて創造的な仕事をしている人は，どこの市町村にもいるものだ．日々，仕事の中に新たな発見をし，新鮮な気持ちで次から次へと仕事に新たな付加価値を生み出しているような人・・・・四国の一自治体より日常性という惰性の連続を打ち破ろう」と全国の自主研啓発誌で呼びかけた．新居浜地域経済構想研究会の頃（1985）には全国区で活躍している講師など外部講師を呼んで，市民の参加を呼びかけた市民講演会も何回となく自主研主催で開催した．講師料などの費用は参加者の入場料ですべて賄った．

やがて1986年に大きな転機を迎えることになる．一つは，職務ではあったが事務局長として手づくり大型産業イベントを成功させたこと，もう一つは，日本青年会議所の全国モデル事業として，新居浜青年会議所が取り組んだ「地域ビジョンづくり」に請われて参加したことである．産業イベントは500万円の市費で，正月明けの厳冬期の４日間，延べ６万人を集客した．それまで，工業都市新居浜には，どのような企業が，どのような製品を，どのような人が作っているか，市民のみならず個別企業も知らないことが多かったので，産業界の情報と具体的な産業人の顔の見える交流の場になった．東京と結んだテレビ会議，CATV仮設実況，毎日の速報発行など多くの初めて体験を盛り込んだ．経済産業省の愛媛県への出向者から「県では2,000万円でも出来ない」と言われた．多くの様々な産業人との個別のふれあいがその後の地域づくりに役立った．

青年会議所のビジョンづくりでは，当時日本青年会議所が開発した「地域資源の洗い出し，掘り起こし」運動をさらに前進させて「QC特性要因図の活用」「資源マトリックス法」「ブレーンストーミングとKJ法の活用」，さらには，当時，日本経済新聞社のまちづくり研究家の亀池宏の提案「ド・ジ・な・こ」という「地域をはかるものさし」を活用した．「ド・ジ・な・こ」とは，「ドキッとする（創造性）」「ジーンとする（人間性）」「なかなかやるな（主体性）」「これは東京にはないぞ（地域性）」である．何度も徹夜し，新居浜の地域資源を徹底的に出し合い，組み合わせて，磨きあって新居浜ビジョンを作った．単なる提言書に終わらせないためビジョン作成手法と「これならJCにもできるぞ」という項目も記載した．青年経済人東京会議で報告し，全国の各青年会議所ビジョンづくりに波及していった．

この時の状況は川喜田二郎の次の記述そのものであった．「創造的行為でいのちが燃えているときには，個人と集団との間に壁はない．このようないのちの燃焼が，メンバーの間に愛と連帯を生みおとす．そこで，その創造的行為が終わり，メンバーが解散しても，彼らはいのちへの郷愁から，再び集まって新しい創造に挑戦したがるのである．」

（川喜田二郎，1992）川喜田の指摘どおりに参加JCメンバーは以後様々な課題解決にチャレンジしていった．

産業イベントもビジョンづくりも私の市民との連携による自主的地域づくりにつながっていった．「異業種連合法人の設立」「CATVの導入」「日本のお手玉の会の設立」「近代化産業遺産活用運動の展開」などである．お手玉は日本全体の資源であるが，主に地域固有の資源のより深い掘り起こし，全国のまちづくりのキーマンたちとの交流も，急速に，より広く拡大していった．1996年には日本青年会議所地域主権委員会アドバイザーとして全国行脚して最終報告書「新人間社会の創造並びにその下での地域主権社会の実現は，自立した自己の責任で行動する個人によって成り立つ」とする提言書をまとめた．

2000年前後には市職員としての成果も積み重ねながら，職務外への活動も際限なく広がっていった．

2000年8月には，私が企画提案し，事務局長として実行委員会を組織して「近代化産業遺産活用全国フォーラム」を新居浜市で開催．三日間で延べ2,300人の参加という盛り上がりにより，その後の全国での産業遺産・産業観光関係活動への起点を拓くことができた．ただ，受付・現地案内などは総て市民ボランティアが担ったことは残念ながら今日に至るも引き継がれていない．

2002年–2003年には，国保課長として愛媛大学医学部看護学科（学科長;河野保子．現人間環境大学松山看護学部学部長）とタイアップした保健事業「高齢者の転倒予防-からだ・足，元気で長寿教室-」を**写真①**のように開催した．

さらに2006年には「まちづくり協働オフィス」を立ち上げたが，その関連事業として，公募による市民の人材育成でポートフォリオ導入によるコーチングのワークショップや看護管理・学校運営でモチベーションマネージャーとして活躍していた鈴木敏恵を講師に取り組んだ．

自治体職員時代は地域の捉え方と地域づくりの主体を求めて職場内の自主研活動を展開し，やがて市民団体を市民と共に設立し，産業起こし，地域づくり，人材づくりを展開していった．筆者が主となって組織させていただいた市民団体は，異業種連合法人・株式会社インキュ21（1987），日本のお手玉の会（1992），銅夢物語・新居浜市民会議（1994），株式会社まち協ネットワーク（2005）などがある．児童養護施設指導員の時には，J.ピアジェ，ワロン，ヴィゴツキー，遠山啓，上田薫，イラJ.タンナー等の教育・心理学関係書籍を活用して園児の養育に努め，商工観光課長の時は近代化産業遺産活用運動を進め2003年に政府の観光カリスマ100選に選定された．「国内では近代化産業遺産の活用が部分的でしかない頃から，新居浜市及びその周辺の近代化産業遺産を独創的アイデアで観光等のまちづくり資源として活用し，近代化産業遺産モデル活用都市の基盤をつくった．」との選定理由で「地域資源を活かしたオープン博物館都市づくりのカリスマ」として選ばれた．地域資源活用型地域づくりの私の一つの到達点であった．

写真①

図①は1997年に描いた「知の増殖イメージ図」である．アメーバー状のつながりである．

地域資源は様々な学問分野と関係性を持って存在してうごめいている．裏を返せば，地域は一つの学問分野で切り取っただけでは全体の包括性は決して表し得ないということである．

地域資源のワークショップの手法・経過を含めてまとめた２冊のビジョン関係本「夢をかたちに」と「銅夢物語・新居浜」が残されているが，この２冊は，今日に至るも全国のまちづくりに活用されている．

文　献

アンリ・ワロン（1965）．児童における性格の起源．久保田正人，東京：明治図書．

銅を活かしたまちづくり研究会（1994）．銅夢物語・新居浜．新居浜市：四国電力新居浜支店．

波多野完治（1965）．ピアジェの発達心理学．東京：国土社．

市原実（2009）．地域再生の仕掛人-観光カリスマ100選．東京：日本文芸社．

イラJ・タンナー（1978）．孤独-愛情恐怖症．新里里春，東京：社会思想社．

J.ピアジェ，A.シェミンスカ（1962）．数の発達心理学．遠山啓・銀林浩・滝沢武久，東京：国土社．

亀地宏（1997）．亀地宏のまちづくり紀行-愛媛県新居浜市-銅の縫糸．地方財務，516,251–264.

川喜田二郎（1992）．現代民主主義の抜本改革，中央公論，7,42–63.

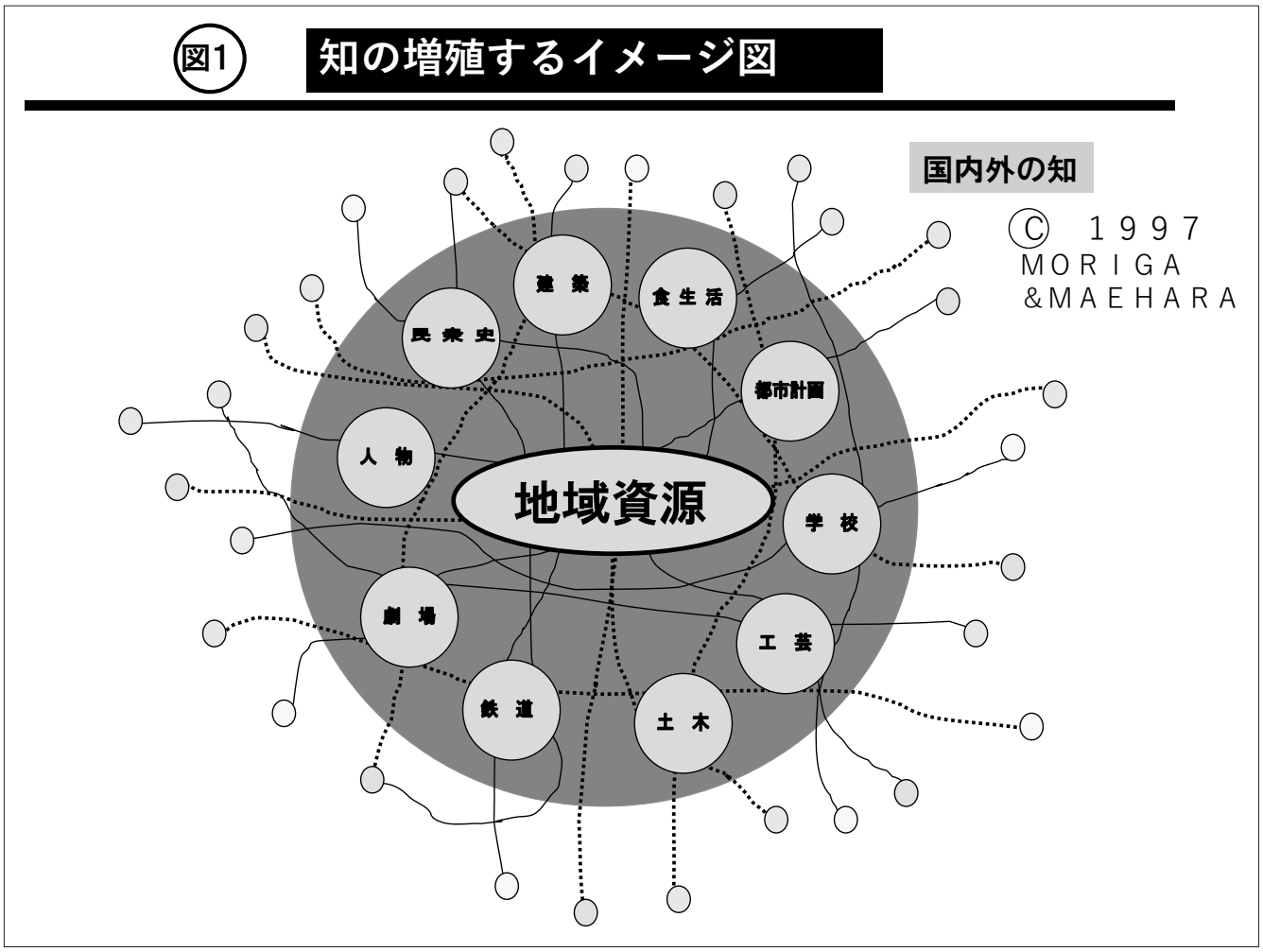
河野保子（2003）．高齢者の転倒予防．松山市．愛媛大学医学部看護学科．

森賀盾雄（1977）．企業都市における市民のまちづくり，瀬戸内産業文化研究，3,97–122.

森賀盾雄（1977）．企業都市の地域考．新居浜市：新居浜地域問題研究会．

森賀盾雄（1980）．子どもたちの最後の砦．東京：明屋書店．

森賀盾雄（1985）．新居浜市産業政策の新展開，瀬戸内産業文化研究，9,43–80.



森賀盾雄（1985）.「惰性の連続」を打ち破ろう，自治のひろば，自治体活性化研究会誌，3,2–4.
森賀盾雄（1987）．新居浜市-新産業は創造できるか，地域開発，277,22–28.
森賀盾雄（1999）.「遠計」の知的都市・新居浜へ，観光文化，134,2–7.
森賀盾雄（1999）．産業遺産を活かした産業文化都市の創造．中嶋信・橋本了一，転換期の地域づくり（224–229）．京都市：ナカニシヤ出版.
森賀盾雄（2000）．産業遺産を活用した「知の増殖都市づくり」へ，月刊文化財，443,38–42.
森賀盾雄（2001）．別子銅山-「四国のマチュ・ピチュ」の異名をとる300年来の鉱山遺跡-．財団法人日本ナショナルトラスト，日本近代化遺産を歩く（116–118）．東京：JTB.
森賀盾雄（2004）．人脈のインテグレーションで知的拠点を構築する，Cultivate，21,68–77.
森賀盾雄（2005）．地域が知を創造・編集・実践する時代，判例地方自治，263,117–120.
森賀盾雄（2007）．産業観光資源から広域的産業観光へ．羽田耕治・丁野朗，産業観光への取り組み（102–105）．東京：財団法人日本交通公社.
日本青年会議所地域主権委員会（1996）．僕らのいくみち僕らでつくる．東京：社団法人日本青年会議所.
新居浜青年会議所（1986）．夢をかたちに-創造的ビジョンづくりの手法と実践．新居浜市：社団法人新居浜青年会議所.
P.F ドラッカー（2008）．マネジメント上・中・下．上田惇生，東京：ダイヤモンド社.
佐藤喜子光（2003）．めざせ！カリスマ観光士．東京：同文館.
遠山啓，和田常雄，榊忠男（1977）.：ゲームによる算数・数学の学習．東京：明治図書.
上田薫（1972）．個を育てる力．東京：明治図書.
ヴィゴツキー（1962）．思考と言語上・下．柴田義松．東京：明治図書.

第3章　筆者が学者として地域で主体的に生きる実践リフレクション
―愛媛大学教員時代―

新居浜市職員36年の勤務を経て2008年4月から2014年3月までの６年間愛媛大学農学部農山漁村地域マネジメントコースに専任教員として，2020年まで６年間非常勤講師として在籍した．このコースは現在同大学社会共創学部に移籍している．コースは「農業経営体と農山漁村の担い手が急速な減少により多数の地域社会の崩壊する危険性に対応して地域再生のリーダーを養成する」という課程として2008年4月に設立された．農家・農業団体・農業企業・行政等の長期インターンシップを特徴としている．

国立大学で初めて創設するということで大学内にいる教員だけでは対応が困難との認識で大学側から要請されて新居浜市職員を辞してコース創設と共に着任した．

担い手の減少などにより崩壊する農山漁村の現実，農林水産物の生産・加工・流通を教えるのも大切であるが，生産基盤である集落そのものが疲弊・消滅の危機に瀕しているとの認識で，当時の泉英二農学部長に「今までの農学部になかった視点で教えてくれ」と言われた．専任教員が３名ということもあり，「起業論」「地域マネジメント論」「マーケティング論」「地域文化論」「地域行財政論」「コミュニケーション論」など十数科目を学部・修士・共通教育で講義した．おそらく当時，愛媛大学では最も講義科目の多い教員ではなかったのかと思われる．これだけ多くの科目をこなすのは大変なことではあったが，科目の全てが横に繋がり，地域経営学の総体的世界を把握できたことが，地域を包括的に捉えることを目指してきた私としては我が意を得た思いであった．それも地域づくりの現場から来て，現場の息吹（リアリティ）を盛り込んだ講義は受講学生の表情，質問，提出レポート等から手応えを実感する（筆者の承認欲求の充足）ことができ，さらなる教育・理論研究への情熱をかきたてられた．ただ，４年間で農山漁村再生のリーダーを育てることは困難であり，2009年にコースで講演に招いた農村社会学の熊本大学（当時）徳野貞雄は「私も同じことを考えたことがあるが，断念した．このような不可能に近いことをよくも始めたものだ．よくやった.」と言われた．

授業以外では，2008年に二つの競争的資金の応募申請作業を中心的に担い，**図の②**のように採択され，実施した．その後の経過を見て，この二つの案件で，少しは愛媛大学の歴史づくりに参加出来たのではなかろうかと思っている．一つは，農学部紙産業修士コース（現バイオマス資源学コース）の立ち上げのために経済産業省の「産学人材育成パートナーシップ等プログラム開発・実証事業」の申請から採択，さらには開設に至るまで，四国中央市などの紙産業界や高知大学，松山大学，香川大学，公設試験研究所との関係者と協議を重ねながら進めた．新居浜市職員時代の産業振興経験と人的ネットワークが役立った．コース開設にあたり紙産業界の科目開設要望の最も強かった「紙産業マネジメント論」と「戦略的マーケティング論」の二科目を2010年度の開設後10年間，筆者がテキスト作成と講義を行った．今日，共同研究の申し込み等，新素材セルロースナノファイバーのこともあり順調に推移している．

もう一つは，文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対

図2　2008年09月26日愛媛大学広報掲載

文部科学省及び経済産業省のプログラムに採択

文部科学省の平成20年度「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」及び、経済産業省の平成20年度「産学連携人材育成事業」に採択されました。

平成20年9月1日（月）に、文部科学省の平成20年度「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に、本学から申請していた「農山漁村地域再生をめざす『地域マネジメントスキル』修得活用事業」が採択されました。

本プログラムでは、農山漁村において過疎高齢化が顕著に進行しているような地域の現状を打破し、活力ある農山漁村に再生するため、退職団塊世代を中心に、不安定的雇用等により転職を考えている人、定職についていない人、農山漁村に関わる公的団体・企業の職員を対象に、1）地域居住意欲、2）地域資源活用管理運用能力、3）地域活性化・新産業創出力のある人材として養成する「地域マネジメントスキル」講座を設け、修了後は「愛媛大学地域再生マネージャー」の称号を付与し、地域に帰り、本学の継続的連携支援体制のもと、共に地域の再生を継続的に進めていきます。

また、平成20年9月16日（火）に、経済産業省の平成20年度「産学連携人材育成事業」にも、本学から申請していた「我が国紙産業の持続的発展を推進し、産学連携でつくり育てる大学院修士コース創設事業」が採択されました。本プログラムでは、全国屈指の多種多様な紙産業が集積している四国において、より複雑多様化する紙産業の将来に対応するために、将来幹部職員となる専門知識を身につけた課題発見解決型の若手人材の安定的確保が紙産業界から望まれていることを受け、産学連携によりプログラム開発・実証を行い、紙産業の大学院修士コースを平成22年4月を目指して開設し、我が国の紙産業人材育成の拠点を構築します。＜愛媛大学＞

愛媛県庁内記者クラブ(番町クラブ)

会見後、個別質問に応じる森賀盾雄農学部教授

応教育推進プログラム」の申請と採択，その後の取組である．世の中が複雑に変転している時代には，高度な学びを就職前の一定期間に閉じ込めるべきではなく，大学は「いつでも，学びたい時に」社会人を受け入れるリカレント教育体制を持つべきであるとの認識で申請した．採択後，2009年度から１年コース（年12回の土日充当）で開設し，2015年度までに１－７期生165名が修了し，履修証明と愛媛大学地域再生マネージャーの称号が付与され愛媛及び周辺各県，関東圏で活躍している．実は，2010年度には文部科学省の支援は終了していたが，「地域にあって輝く大学」を目指す愛媛大学として学長裁量経費で継続されたのである．この取組はその後の愛媛大学の社会人・地域密着型人材育成講座のモデルとなっている．文部科学省の助成金は2008-2010年各年度1,000万円を超えていたが，その後は学長裁量経費各年度約160万円，一部参加者負担で開催した．この社会人講座を修了した者の中から農学部の社会人修士コースに進学し，修士学位を取得した者が７名，さらに連合大学院に進学し，博士学位を取得した者が２名いるのである．

農山漁村地域マネジメント特別コースは，2016年4月に農学部から社会共創学部に移行したが，筆者は農学部で同コース創設から６年間，専任教員として，2010年教授選任，2012年からコース長を務めた．

2009年9月30日には松山大学より論文『産業文化都市創造論』により博士（経済学）学位を取得した．これは，主に第２章の新居浜市職員時代の課題意識を理論研究した成果である．なお，産業遺産活用，産業観光について学者としての取組は今日まで続いている．

文　献

森賀盾雄（2008）.「産業観光」が拓く知の世界．運輸と経済，68（6），43–52
森賀盾雄（2009）.「煙と汗」のしみ込んだ美しき遺産たち．土木学会誌，94（1），24–25.
森賀盾雄（2009）．産業文化都市創造論．東京：桃青社.
森賀盾雄（2010）．産業遺産活用から産業文化都市創造へ.ECPR，26（1），16–23.
森賀盾雄（2011）．産業遺産を活かした知的ツーリズムの展開．国際文化研修，16（4）.
森賀盾雄（2011）．日本列島の特質と観光-その底流，そして四国-．四国運輸研究，29,2–12.
森賀盾雄（2014）．私の地域密着型「知のジパング」活動．サイエンスコミュニケーション，3（1），18–21.
森賀盾雄（2016）．産業・生業遺産を活かすツーリズム展開．四国運輸研究，34,2–10.

第4章　筆者が地域づくり人材育成で主体的に生きる実践リフレクション
―地域人材塾時代―

愛媛大学の社会人講座を修了して愛媛大学地域再生マネージャーの称号を付与された社会人が165名になり，彼らが自発的に「愛媛大学地域再生マネージャー・アカデミー」という組織を立ち上げ，相互連携事業等を行っているが，さらなる自主的自発的な学びの場として継続するために筆者を塾長として「地域再生塾」を開催し，メンバー相互の実践経験の報告，相互アドバイスとさらなる専門知識の修得に務めている．

2014年度は６回，2015年度は４回，2016年度は５回，2017年度は４回，2019年度は３回，2020年度と2021年度は新型コロナ禍の影響で１回ずつの開催，土日二日間で，計26回，延べ50日，延べ915名が参加している．愛媛大学農学部の教室，愛媛県内各地の塾生が活躍している場所などで開催してきた．参加者塾生から１日あたり1,500円～2,000円程度の参加費負担で，ゲスト講師の旅費，会場費等に充てている．塾長は無報酬である．

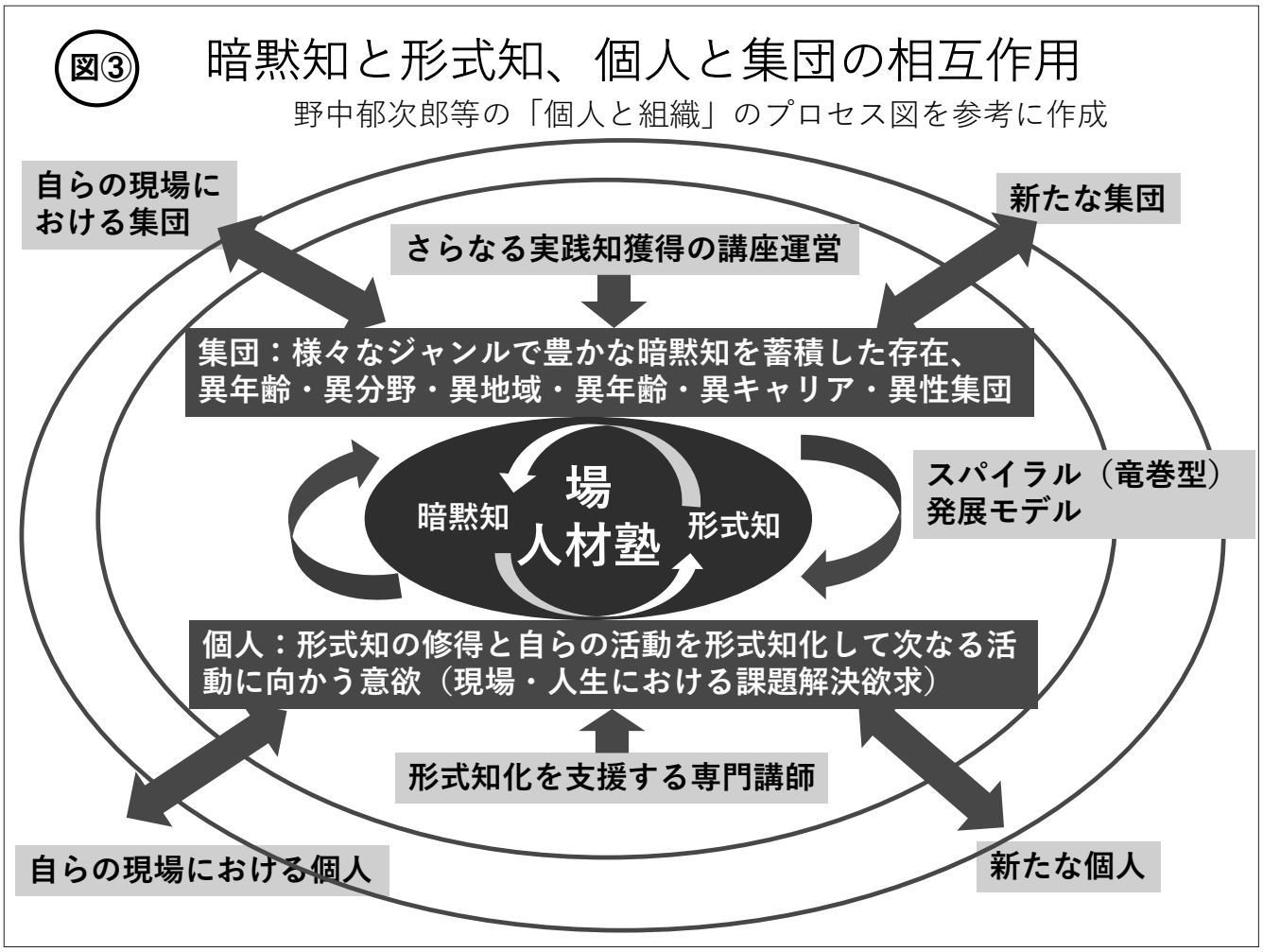
公的資金等をあえて活用せずに自主自立運営で行っていて，それでも難なく開催できている．外部講師は塾長のネットワークで実務実践型の現場に有効な講師を選んでいる．マネージャーでない人の参加も歓迎しており，愛媛県内をほぼカバーする地域づくり集団として成長している．地域・年齢・職種・キャリアも様々で，その多様性が生きている．すでに地域のリーダーとして活躍している塾生がほとんどで，愛媛県内の様々な地域活動にはマネージャーと地域再生塾の受講生が関与している場合が多い．

「にいはま未来創造塾」は2015年度に，新居浜市内の公共施設を会場にして夕方の３時間を当てて，新居浜市を中心に10名の運営委員で計16回開催した．一回の参加費は一人1,000円で会場費，講師謝金のすべてをまかなった．新居浜市内の参加者が中心であったが愛媛県内，近県からの参加者も得て盛況であった．参加塾生80名，延べ500人が参加．やはり，塾長は無報酬である．

須崎市の地域づくり人材の育成として「須崎未来塾」を開催．私が塾長として2013年度はプレ講座３回，2014年度から本格開催．１年コース．年７回土日で14日．全国的な実践型講師を投入して，講話だけでなく，フィールドワークなども行いながら開催した．2018年度まで５ヶ年で終了．５年間で35回70日開催．60名が修了して須崎市地域再生マネージャーの称号を付与されて地域で活躍している．在籍した塾生は80名．修了生は「未来塾同創会」を組織している．この塾は須崎市の年間250万円程度の経費で運営し，塾長は条例で選任されていた．

なお，これら三塾の合同塾を2回，小豆島で開催している．

地域人材塾は，開催している「場」が豊かな暗黙知と実践知に溢れていなければならないし，形式知に置き換える能力を備えた「場」でもあるが，形式知に置き換えることのできなかった暗黙知を蓄積・温存する「場」でもある．



塾生個人と塾全体との相互作用に真剣さと新鮮さ感じられなくてはならない．塾開催の基本姿勢は次の６点である．①塾生も講師もお客様ではなく塾開催の主体者であり，②しっかりとした考えを持ち，③特定の考え方を押し付けないで，④自由闊達な議論を展開し，⑤塾生の多様性を尊重し，⑥塾生の活躍・成長をお互いに支え合う・・といったところである．なお，**図③**は筆者の考えた人材塾における暗黙知と形式知，個人と集団の相互作用の仕組みである．

2015年には，三塾の常連講師と塾生２名により三塾の成果と今後の展開のため『地域からの未来創生』を出版した．さらに，三塾の塾生たちは，起業したり，地域特産品づくりに取り組んだり，食育・フードロス削減・無農薬栽培・マグロ養殖・動物園のアフリカ象支援など多様な活動を展開し続けているが，以下の塾生のように活動を理論的にまとめ，さらなる活動を展開している者もいて，地域人材塾の展開における理論的拠り所を形成してきている．和田広美（宇和島市），西山敬三（松山市），西川則孝（西条市），藤井文子（宇和島市），森智子（今治市），難波江任（新居浜市），土井利彦（大洲市），山岡ヒロミ（松山市），矢野邦子（松山市），守時健（須崎市）．

文　献

土井利彦（2015）．小さな集落から未来を．望月照彦・森賀盾雄，地域からの未来創生（206–228）．東京：学文社．
藤井文子（2018）．管理栄養士・栄養士の実践マネジメント．大阪市：メディカ出版．
難波江任，原田佳子，土手政幸，糸山智栄，今村主税，全国食品ロス削減研究会（2022）．瀬戸内食品ロス削減団-フードバンク活動入門．京都市：クリエイツかもがわ．
西川則孝，西川文抄子（2019）．ちろりんだより．松山市：創風社出版．
西山敬三（2013）．自適農の無農薬栽培．松山市：創風社出版．
西山敬三（2017）．自適農の地方移住論．松山市：創風社出版
マイケル・ポラニー（1980）．暗黙知の次元．東京：紀伊国屋書店．
望月照彦，森賀盾雄（2015）．地域からの未来創生．東京：学文社．
守時健（2022）．日本一バズる公務員．東京：扶桑社
森智子（2015）．個が育つ地域づくりの「場」を求めて．望月照彦・森賀盾雄，地域からの未来創生（186–206）．東京：学文社．
森智子（2021）．ケアのちから．美須賀病院看護部，実践！て・あーて（85–101）．松山市：創風社出版．
山岡ヒロミ，なかがみけいこ（2012）．ボクたちは家族Ⅰ．松山市：かぐや媛．

山岡ヒロミ，なかがみけいこ（2014）．ボクたちは家族Ⅱ．松山市：かぐや媛.
山岡ヒロミ，なかがみけいこ（2015）．ボクたちは家族Ⅲ．松山市：かぐや媛.
矢野邦子（2015）．えひめ食の探検．松山市：愛媛新聞サービスセンター
和田広美（2021）．幼児期における地場産物を教材とした食育活動プログラム．若林良和，食育共創論（80–95）．東京：筑波書房.

第5章　考察Ⅰ；地域で主体的に生きるとは

（1）地域で主体的に生きるための立ち位置

地域を運営する基本的な単位は通常は市町村であり，県である．行政組織は前例踏襲と無謬主義が支配しており，また人事評価制度は導入されたものの職場の上司が評価することから上司が命令・許可して職務をこなすピラミッド組織ゆえに上司の地位を揺るがす創造的な仕事のプラス評価はされにくい組織風土である．すなわちイノベーションの生じにくい組織風土である．「自治体職員が最も身につく資質は責任感・忍耐力・協調性などであり，最も身につかない資質は先見性・創造力・表現力である（大森彌，1994）」と言われている．今日においても，それを否定する自治体職員も多くはいないはずである．

自治体職員の多くは困っている地域住民の立場に身を置いて考えるが，いざ行動するとなると法律・制度遵守で公平性を尺度として自治体組織を代表してふるまう．もちろん法律順守は当然であるが，法律の適用もできる限り行政の都合の良いようにふるまう．ただ，制度の運用で住民の悩みをできる限り解決しようとする職員も少数だが存在している．

自治体職員は「県民のため」「市民のため」と住民をまとめた一般的呼称で語ることが多いが，それは具体的な県民や市民の姿を消し去る都合の良い言葉でもある．バルザックは近代公務員制度が出来た頃に「『すべての人びと』に仕えるということは『だれにも』仕えないというに等しい.」と公務員の生態を描いた（バルザック，1841）．現場に出かけて具体的な住民と会って話すといつも新鮮さがよみがえり葛藤することもあるが，次第に葛藤することも少なくなり惰性の日常が職員を支配することとなる．黒澤明が名作映画「生きる」で公務員の生態を鋭く描いたのは1952年である．「自治体の職員には『人財』『人材』『人在』『人罪』『人災』の五とおりがいて，最も多いのが人在である．（田中義政，1993）」と書いた破天荒な自治体職員もいた．また，行政は住民を複雑な制度により，住民を細かく「該当する，該当しないと二元論で細分化する（池上甲一，2013）」．こうした状況下で「地域で主体的に生きる」にはどうしたらよいのだろうか．

まずは，自分の所属などは無視して風呂敷を広く広げる．地球儀，日本地図，新居浜市の地図．自分が今どこにいるのかを確認する．さらに自分は何者かを考える．さらに自分の周りでわからないことは何かを考える．わからないことを知りわかろうとするのは自分の存在確認である．市役所で自分の所属部署以外の部署は何をしているのか，所属部署や市役所で知りえないことは自分で学べばいい．組織の一員としての安住に寄りかかるのではなく，自分とつながる地域への「不知の自覚（かつては「無知の知」と呼ばれていた）」の向こうには茫漠たる知の海原が見えてくるのである．筆者の市職員時代はこのような始まりであった．自分の部署以外のことを知るためには自主研究会をつくり他の部署のメンバーを入れて聞けば良い．地域の現場がわからなければ行けばよい．

広大な住友の工場用地に入れなければ，資料を集めて研究して突き止めればよい．ただ，新居浜市の様々なことを知ろうと思えば新居浜市の固有の情報だけで知り得ることではない．世界を知らなければ知り得ない．じゃあ，終わりなき学びを継続しながら，人々に喜ばれることをしながら生きるとするか，と始めて50年．これは梶田叡一・溝上慎一の「Stage1 家族・友人の間での原初的アイデンティティからStage2 我々の世界（世間）での社会的アイデンティティ，さらにはStage3の我々の世界（世間）と我の世界での主体的アイデンティティへの自己形成過程（溝上慎一，2008）」を想起するが，実際はこのように段階論的に進展するものではない．私はStage1，Stage2，Stage3の全てが混然一体となり主体的に生きる宣言をしたのである．

しかしながら自治体内部の現状温存的な知的閉塞状況はことのほか強固である．地域の現場を大切にするのは良いのだが，住民の一人ひとりの悩みは，自分の担当部分のみで対応する．一人の個性的住民の人格を統合して見ない．細分化された住民を細分化された職員が対応する．結果として地域の人々を統合した主体として見ない「人格軽視の似非現場主義」に陥り，他者の人格軽視により自らの人格をも軽視してしまうのだが，それに気づくこともない．

自治体や企業の統制型組織で自己を押し殺した状況で蓄積されたストレスを取り除き，自己をリセットする場として注目されるのが，職場・家庭とは違った居心地の良い場所として，オルデンバーグのサードプレイスなどの「場」，日本的には望月照彦の意味付けた「屋台」があり，古くは17世紀半ばからのロンドンにおけるコーヒー・ハウスがある．ただし，そこで部分化された自己の全体性を取り戻せたとしても，新たな知的刺激を得て創造への積極面へと導くことがなければ単なるリフレッシュ装置に終わってしまうのである．

友達が間違ったことをしていても咎めないことの多い同期会とか同窓会，慣習に包まれた地縁的仲間の居場所，い

ずれも必要ではあるが，また部分的に正しいことを内包しているがゆえにやっかいな世界であり，それらの組織では新たな創造は起こりにくい．解決すべき課題を掲げたMission型組織の登場は新鮮であったが運営が未熟な段階では往々にして批判的精神が封じ込められた組織に転落することもある．目指すは相互批判も許容された強い参加型ネットワークだ．ただし，参加型ネットワークを維持するには自己の主体確立が前提となるのである．

「お互いの違いを認識し，積極的に評価し合い，協力できるところでは協力し，対立するところでは対立しながら，自発性を基本に交流する・・ということは対立することも認めるということであり，情熱と，ある種の余裕をもって対立したものを認めることができるためには，自己が確立していることが必要だ．（金子郁容，1987）」

（2）地域で主体的に生きるために

さて，このような市職員時代の思索状況から今日に至る筆者の思索経過を整理した**表②**に基づき考察する．

①「地域の捉え方」は，日本地図や世界地図を上下（南北）逆にしてみることで思考することが新たな気づきをもたらすこともある．日本は意外とロシアと近いが，かつて「裏日本」と言われた日本海側が夜明けの海辺であるならば，とか，また自分の足元が世界の中心と考えたらどうかとか，地域は歩いて行ける範囲，車で日常行く範囲，四国，西日本，日本，東アジア，ユーラシア，地球，太陽系と際限なく伸縮自在である．一人の人間の中にも各臓器の地域がある．これらすべてがつながって動き変化している．地震の多発・顕在化により私たちは地質的人間であったことを思い起こされる．「われわれはもともとが『地質的存在』であることを，ふだんはすっかり忘れている．われわれは造山運動とプレート・テクトニクスの揺籠の上に寝ている赤ん坊たちなのだ．いつ揺籠が空中に吹き飛んだとしてもおかしくはない．（松岡正剛，1995）」のである．「ぶらタモリ」「ぽっつん一軒家」などの番組や「ジオパーク」は地質的人間思考の現れなのだ．目に見えないネットでつながる地域空間も急速に増大している．微生物と人間の共生関係の地域空間を考えると何が見えるのか．制度的に作られた地域空間の境界を外すと地域の無限の可能性と地域に生きる主体の「偶然の驚き」が垣間見えてくるのである．

②「思考方法」は，人は他者との関係で自己を確立する．もちろん社会悪のような他者との関係は歪んだ自己を形成するのだが．地域主体形成といっても，伸縮自在の地域概念の下では市町村行政区域内とか日常の住空間で出会う他者との関係だけで自己を確立するのではない．いとも簡単に境界を越えてつながる．東京経由でなくてもリアルに過疎地域と海外の地域とがつながる時代である．主体形成を取り巻く環境の変化により誰が誰とつながっているかは判然としないことを前提に思考しなければならない．

私たちは，今日の科学技術の発展を導いたルネ・デカルトの「心身二元論」と「要素還元主義」に立ち返り，「心身一如」と「複雑系相互関係主義」を対置しなければならない．他者とのやりとりで自己を向上させ，また他者を高め，分析科学により細かく分けられ失われた要素間の関係性に未来を見つけなければならない．地域主体形成はそこまでしなければ本質は見えてこない．なにも私が複雑化させているわけではない．脱近代に向けた動きは，分析科学の未曽有の発展をもたらした近代科学誕生時から存在して

表②　地域で主体的に生きるための私の思索経過

	市職員時代	大学教員時代	人材塾時代
地域の捉え方	動態的地域,包括的地域,伸縮自在の地域,行政地域と実態地域	地質・空間を含めた地域,宇宙の中の地球地域,バーチャル地域空間	生物共生の地域,非限定地域
思考方法	デカルト心身二元論の克服,弱さの強さ,真の現場主義,複雑系の知,知の地域内閉じこもり克服,不知の自覚	日本的思考,知覚と観察重視,暗黙知と形式知の相互作用	人間至上主義からの脱却,見える・見えない関係性重視
統合主体	生活者,属人主義,身体知,知行合一	多様な主体,個人を全体として(全機的に)捉える	創費者,パッションとミッション
共生の場	古典的コーヒーハウス(ロンドン),開放的コミュニティ, 屋台,ネットワーキング	共通善を目指す多様な主体の集合場,サードプレイス,クリエイティブで居心地の良い場所	伸縮自在の先進公共圏,異脳者連携ネットワーク
先導的共生コア	参加型ネットワーク,ミッション型円卓組織,生き物のような集団	ゆるやかな実践・理論知的刺激集団,相互ケア集団	自発的実践異脳エネルギー供給集団
主な参考書籍等	大森彌『自治体職員論』、田村明『まちづくりの発想』、黒澤明「生きる」、バルザック『役人の生理学』、川喜田二郎『創造と伝統』、天野正子『「生活者」とはだれか』、二宮厚美『生活と地域をつくりかえる』、今井賢一関係、金子郁容『ボランティア』、同『ネットワーキングへの招待』、松岡正剛関係、マンフォード『都市の文化』、田坂広志『複雑系の経営』、伊丹敬之、寺田寅彦、森政広『非まじめのすすめ』関係、溝上慎一『自己形成の心理学』、広井良典『医療の経済学』	野中郁次郎、ドラッカー、リチャード・フロリダ、シュンペーター、コトラー、内山節関係書籍,中村雄二郎『臨床の知とは何か』、社会関係資本関係、社会的共通資本関係、『生業から見る日本史』、アナール学派歴史学、原田律『むらの原理都市の原理』、斎藤孝『コミュニケーション力』、結城登美雄『地元学からの出発』、オルデンバーグ『サード・プレイス』	レジリエンス関係、宇根『愛国心と愛郷心』、奈良本達也『日本の私塾』、童門冬二『私塾の研究』、承認欲求関係、中村桂子生命誌関係、福岡伸一『動的平衡』関係、モントゴメリー『土と内臓』、アランナ・コリン『あなたの体は9割が細菌』

いて捨ててきたアートの世界に光を当てることに急速展開してきているのだ．一人ひとりの地域主体を統合的に捉え，地域の人を包括的にみるという背景はここにあり，技術や技能の違いなどもやはりデカルト超えの課題なのだ．そのための日本的思考法の有効性がすでに様々な識者により論じられてきている．

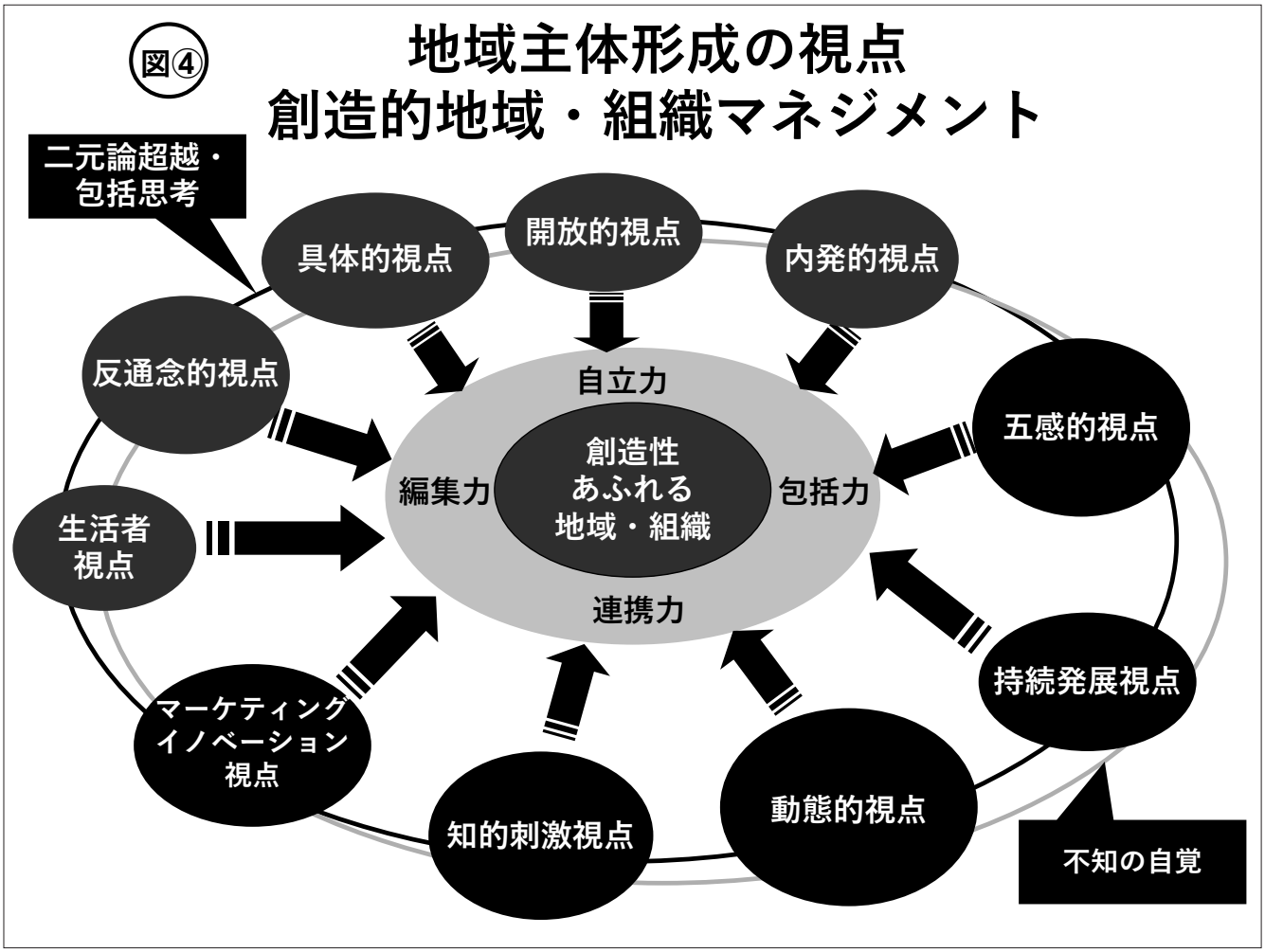
③「統合主体」は，生活者，労働者，消費者，国民，県民，住民に分けて研究され，行政の施策が行われてきたが元は一人ひとりの具体的存在である．統合的に一人ひとりを見るということはこれらの名称で呼ばれるすべての適用をまずは全廃して先入観なく臨床的にそのままの姿をドラッカーが重視した「知覚と観察」で観る必要がある．「生物的なシステムには，部分はなく全体が全体である．それは部分の和ではない．情報は分析的，概念的である．しかし，意味は分析的，概念的ではない．知覚的である．（ドラッカー，1989）」私たちは意味を問わなければならない．自己と他者の意味を問わなければ統合主体は見えてこない．様々な法令により制度的に該当，非該当の線で切り刻まれた私たちは，それに慣らされ，また慣れて他者を刻んで理解する．統合的に見るどころか部分化して見ることに堕した見方であるが，それを自覚した主体にならなければ始まらない．コトラーマーケティングの基本であるSTPのS，すなわちSegmentationなども部分化思考の一例であり，顧客としての生活者から反撃を受ける時代が来ている．

④「共生の場」は，多様な主体が集い，知的刺激があり，様々な発見があり，生きる実感が得られ，自分が人の役に立てるような居心地の良い場で，「先導的共生コア」は共生の場が社会を変えてゆく地場のように成長した場である．いずれも共通善を目指した場である．それらの場は決してクリーンで清潔感にあふれた場でなければならないのではない．喧噪でやや猥雑で悪戯っけがあったり，笑いにあふれていたりもすればよい．みんなが袴を脱いで上下関係は無くて，年配者や権威者にはそれなりの敬う心さえあれば良い．

このようにして，到達した筆者の地域主体形成の視点を**図④**に掲げておく．

（3）松山看護学部シラバスとテキスト『地域からの未来創生』とコマ構成の関連

テキスト『地域からの未来創生』は松山看護学部が創設されるわずか二年前に出版した私の編著書で，まさに「地域に主体的に生きる」ための現場実践と理論を紡いだ成果であり，私が塾長として開催してきた三つの人材塾の講師



図⑤

テキスト『地域からの未来創生』の内容

第１章　新しい地域と生活の創造・・望月照彦
第２章　地域からの地域主体力形成論・・森賀盾雄
第３章　地域こそが日本の未来を創生する
①産業・生業から創生する地域未来観光・・丁野朗
②地域価値創造マーケティング・・上野祐子
③優しさとマインドによる地域の店舗デザイン・・神谷利徳
④価値創造の地域デザイン・・井上弘司
⑤ 生活先進圏に向けて・・川井保宏
⑥個が育つ地域づくりの「場」を求めて・・森智子
⑦小さな集落から未来を・・土井利彦
⑧地域おこしヨソモノ活動記・・冨田敏

森賀執筆「第2章地域からの地域主体力形成論」の内容

①混沌の地域から
②地域「知力」の源泉
③包括的動的思考の展開と地域主体力形成
④小さき民の主体復権
⑤自治体・住民の協働を可能にするプラットホーム
⑥先導的地域公共圏と自主自立人材塾
⑦真のグローバル連携へ

と塾生の産物である．この中の私の論考「地域主体力形成論」は，(1)（2）節で論じた内容を従来の先行研究を超える視点で論じたものである．

共に編集執筆した望月照彦は「実は，この本を出版した動機は，相棒の森賀盾雄氏が中心になって進めている３つの塾がきっかけとなっている．１つは愛媛大学地域再生マネージャー『地域再生塾』，これは森賀教授の大学での社会人講座の教え子たちが，講座修了後にも学びを継続したいという願いが核になって市民へもオープンになっている一種の『私塾』を誕生させた．２つ目は須崎市の楠瀬耕作市長が，市民からの起業家創造をめざすために設立された組織『須崎未来塾』であるが，森賀氏がやはり塾長を務める『市塾』である．この２つの動きに刺激されて，全くの市民だけの有志によって設立・運営されているのが『にいはま未来創造塾』．それぞれが『私塾』の流れをくむものとして，私は吉田松陰の『松下村塾』や緒方洪庵の『適塾』の現代版だと思っている．ヨーロッパにおける大学の始まりは，ボローニャ大学のように学びたい市民が金を出して教授陣を集めた私塾であるから，これらそれぞれの塾は市民的学びの原型を持っている．私の友人のような個人私塾を含め，日本の未来は再び『学びの場』から起こっていくだろう．この本の10人の執筆者は地域塾の『地域知』を担ってきたが，明日の塾生たちが，この本を＜懐に持ち歩いて＞，地域未来の糧にしてくれることを期待している．」と記述している．

私共の人材塾はいわゆる人材育成の講座とは違うと考えている．何が違うのか．人材塾は参加する塾生はお客様ではない．塾生は全員運営主体である．さらに人材は芸術作品と同様に「つくる」ものではなくて「生まれてくる」ものではないのか．2008年7月4日，炭鉱跡の廃校を彫刻公園にしているアルテピアッツァ美唄を訪問した折に，世界的大理石の彫刻家・安田侃は「アートはつくるものではなく生まれるものだ」と筆者に語った．人材はまさに芸術作品なのだ．

こうして出版した『地域からの未来創生』を2017年度当初より「愛媛を学ぶ」のテキストとして活用しているが，**図⑤**にテキスト内容を，**表③**に2021年度授業で使用したテキスト部分とテキスト外で取り上げた関連書籍等を掲げている．10，11コマの「地域再生に挑む人たち」は地域再生塾の塾生たちの臨場感あふれる取り組みを内面の葛藤を含めて講義した．関連書籍として塾生たちが書いた書籍，雑誌掲載文も取り上げた．

表③　2021「愛媛を学ぶ」各コマ関連書籍等

各　コ　マ	関連書籍等
①地域とは-世界の中心で愛を叫ぶとは	テキスト（森賀①）,森賀盾雄『企業都市の地域考』,D.モントゴメリー『土の文明史』,アランナ・コリン『あなたの体は９割が細菌』福岡伸一『動的平衡』
⑤日本の中の四国、そして愛媛	寺田寅彦「日本人の自然観」,木村学『地質学の自然観』
⑥災害列島の中の愛媛-観測史上最大被害の台風1899年-	森賀盾雄近著『流亡!はるかなる山河』,同『産業文化都市創造論』,柳田邦男・酒井明子編著『災害看護の本質』,ポーリン・ボス『あいまいな喪失とトラウマからの回復』,黒川雅代子など編著『あいまいな喪失と家族のレジリエンス』
⑦柑橘・真珠王国愛媛の展開	愛媛県青果農業協同組合連合会『愛媛県果樹園芸史』,小林憲次『愛媛県真珠養殖の変遷』,橋本卓爾ほか編著『地域産業複合体の形成と展開』
⑧工業都市四都物語-今治・西条・新居浜・四国中央市-	森賀盾雄『産業文化都市創造論』,ルイス・マンフォード『都市の文化』,ジェイン・ジェイコブス『アメリカ大都市の死と生』,同『発展する地域衰退する地域』,東秀紀『漱石の倫敦、ハワードのロンドン』,リチャード・フロリダ『クリエィティブ都市論』
⑨地域創生のための地域を考える-	テキスト（森賀①②）,大野晃『山村環境社会学序説』,同『限界集落と地域再生』,今井幸彦編著『日本の過疎地帯』,増田寛也編著『地方消滅』,広井良典『人口減少社会という希望』,堂目卓生『アダム・スミス』,C・ダグラス・ラミス『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』,ドラッカー『すでに起こった未来』,マイケル・ポラニー『暗黙知の次元』
⑩地域再生に挑む人達-山岡ヒロミと宮部元治の場合　-	テキスト（土井利彦執筆分,冨田敏執筆分）,山岡ヒロミ『絵本ボクたちは家族』Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,西山敬三『自適農の無農薬栽培』,同『自適農の地方移住論』,藤井文子『管理栄養士・栄養士の実践マネジメント』
⑪地域再生に挑む人達-森智子・山下由美の場合-	テキスト（森智子執筆分）,森智子「みんなのものになっていく」,西川則孝・文抄子『ちろりんだより』,やのくにこ『えひめ食の体験』
⑫四国・愛媛の道と四国遍路	辰濃和男『四国遍路』,山本和加子『四国遍路の民衆史』,シュライバー『道の文化史』,S・フライネス.W・J・ディーン『歩行者革命』,清水正史『伊予の道』,宇沢弘文『自動車の社会的費用』,高橋順子「四国遍路『お接待』に潜むケアの要素,楠本和彦ほか『四国遍路に関する心理学』を中心とした文献研究,竹森元彦「四国遍路とそのコミュニティにみられる心理療法としての機能」
⑬包括的動的に見る地域	テキスト（森賀③）,森政広『「非まじめ」のすすめ』,同『「非まじめ」思考法』,川喜田二郎『創造と伝統』,同『野生の復興』,金子郁容『ボランティア』,同『ネットワーキングへの招待』,
⑭「個の主体復権」と地域	テキスト（森賀④）,安積得也『詩集・一人のために』,バルザック『役人の生理学』,黒澤明『映画・生きる』,プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』,
⑮地域づくりのプラットホーム	テキスト（森賀⑤⑥⑦）

表④　2021「愛媛を学ぶ」各コマ受講学生感想

コ　　マ	主な感想
①地域とは-世界の中心で愛を叫ぶとは-	緊張したが集中できた。愛媛出身だが知らないことばかり。
⑤日本の中の四国、そして愛媛	日本列島の特質すごく面白い。日本人は心と体の両方を使い学ぶ日本的思考の特徴が心に残る。
⑥災害列島の中の愛媛-観測史上最大被害の台風1899年-	災害看護への興味が高まった。災害が原因で川を伝って遠くまで流され未だ行方不明の人がいることに驚きです。
⑦柑橘・真珠王国愛媛の展開	問題点や課題も知れて良かった。食べたことのない愛媛の柑橘品種もあった。
⑧工業都市四都物語-今治・西条・新居浜・四国中央市-	様々なものづくりがさかんなことを知った。今治が海事都市ということを初めて知った。
⑨地域創生のための地域を考える-	自分の想像以上に人口減少が進んでいる。暗黙知と形式知の区別は判ったが講義内容は少し難しかった。
⑩地域再生に挑む人達-山岡ヒロミと宮部元治の場合　-	地域のために様々なことをしていることが分かった。10年以上も続けているのは驚き。写真資料が多くて分かりやすい。それぞれの人が自分のできることを頑張っているのはすごい。
⑪地域再生に挑む人達-森智子・山下由美の場合-	地域再生の為にあらゆることに取り組んでいるのはすごい。健康で普通の生活ができることはありがたい。様々な苦難を越えて前進しているのはすごい。自分の経験や知識、人への思いやりをもって頑張っている。命を大切にして生きていかなければ。私も人の為に行動できる人になる。
⑫四国・愛媛の道と四国遍路	四国遍路と医療のつながりがあること神秘的。四国遍路の自然治癒力はすごい。鈴をつけているのは歩くリズムのためとは納得。
⑬包括的動的に見る地域	デカルトの心身二元論初めて知って良かった。世の中ゼロか100ではない、医療現場でも100%合っているケアはないのかな。細分化されたものがつなぎ合わせても元に戻らないということが印象的。哲学はとても深いと感じた。昨日の自分と今日の自分は同じなのかが気になった。
付記・この感想は受講学生の同意により掲載するものである。	

講義に対する学生のコメントとしてはほぼ同じシラバスの2020，2021年度両年度の授業アンケート自由記載では次の反応を得た.「授業がとても分かりやすくて楽しいです.」「身近なことを関連つけて講義をしていたので聞き取りやすかった.」「授業の中で１番楽しみにしている授業です.」「楽しいです！」「愛媛のことを何も知らないでこの講義を受けているので，一つ一つの情報がとても新鮮です.」「愛媛について詳しく知れたことがとてもいい機会だと思いました．とても興味深い授業で面白い内容であった.」

2021年度授業での各コマ講義後に受講学生に聞いた主な感想は**表④**である．概ね狙い通りの結果が得られているようだが，暗黙知と形式知についてはもっと分かりやすく講義しなければならない．看護専門職を目指すためのとても大切なファクターだから.

文　献

バルザック（1997）．役人の生理学．鹿島茂，東京：筑摩書房.
池上甲一（2013）．農の福祉力．東京：農山漁村文化協会.
金子郁容（1987）．ネットワーキングへの招待．東京：中央公論社.
小林章夫（2000）．コーヒー・ハウス．東京：講談社.
松岡正剛（1995）．孤客記背中のない日本人．東京：作品社.
溝上慎一（2008）．自己形成の心理学．京都市：世界思想社.
望月照彦（1977）．マチノロジー・街の文化学．東京：創世記.
西研（2019）．特別授業「ソクラテスの弁明」．東京：NHK出版.
大森彌（1994）．自治体職員論．東京：良書普及会
オルデンバーグ（2013）．サードプレイス．忠平美幸，東京：みすず書房.
P.Fドラッカー（2004）．新訳新しい現実．上田惇生．東京：ダイヤモンド社.
田中義政（1993）．輝け！さだめなき自治の中で．東京：公人社.
谷口功一・スナック研究会（2017）．スナック研究序説日本の夜の公共圏．東京：白水社.

第6章　考察Ⅱ；地域で主体的に生きる看護専門職の創出

（1）　講義修了時の受講学生の決意

本章は看護専門職を目指す学生達への地域との結び合いを講義として提供するために特にこだわりをもって取り上げていることなどを論じてみたい.

まず，愛媛を学ぶ講義終了時に受講学生に聞いた卒業までのスキルアップと10年後地域とのかかわりについての決意を記載してもらいまとめた**表⑤**を見てみよう.

それぞれが，よく決意出来ているのではないだろうか.1回生の前期授業修了時にすでに，看護専門職を目指すことにためらいはなく，10年後の地域との係わりについてもしかりである．ただ，よく出来すぎているのが気になる.本学部の基礎科目は総合大学の共通科目に当たり，他大学

表⑤　2021年度受講学生の受講修了時（2021.8）の決意

	あなたの卒業までの能力獲得と能力アップ	10年後あなたは地域と如何に係わるか
①	看護師資格に加えて救急看護認定看護師資格取得を目指している。そのために大学4年間で基礎をしっかり身につけ実習先で多くの経験を積み自分自身をスキルアップさせる。	病院や保健所に理由があり足を運べない人のために訪問し、多くの人と係わり問題解決して笑顔溢れるように地域貢献したい。
②	患者の気持ちをよく考え行動できるようになりたい。今はまだどのような人でも受け止めることはできない。死にたいと思う人の気持ちを変える看護師になりたい。	生まれ育った地域に帰って看護師をしたい。子供より高齢者の方が多い。病院に行けない高齢者もいる。訪問看護で気軽に医療を受けられるようにしたい。
③	初対面の人とでもコミュニケーションがうまくできるようにしたい。技術はもちろん、患者や家族の気持ちが理解でき、患者が困っていることに気づくことのできる看護師になりたい。	地域を良くしていくために、住まいの近くで巡回検診や訪問看護を今まで以上に取り入れる。巡回検診で早期発見、訪問看護で容態確認し看護師も高齢者もお互いが安心できる地域にしたい。
④	職場の仲間や患者に信頼され、頼られる存在になりたい。大学での学びと経験を活かし、患者の些細な発言を汲み取りアクシデントの起こる前に対処できるようになりたい。	人と人との信頼関係は看護師としては必要不可欠。相手のことをよく知り、よく考えて発言する。そのような信頼関係が病院と地域の関係を良くする。
⑤	勉学に励み、正しい知識を身につけ、実習では現場で見たことや現場の看護師から聞いて学んだことを自分の財産にする。また自分の財産だけでなく他人と共有し、より良い財産にしたい。	地域の高齢者やその家族を対象に在宅看護の講習や指導をしたり、小中学校などで看護や病気について教えに行ったりする。病院などでイベントを行い地域を盛り上げる。
⑥	社会人としての基本が身に付き高度な知識と技術をもった看護職を目指す。スポーツで鍛えた向上する気持ちを臨床現場に活かし向上する。挨拶・礼儀・謙虚さ・笑顔の定着。	地域の子供から高齢者に寄り添い、この人なら何でも相談できると思ってもらえる看護師を目指す。10年後医療従事者の私は地域の役員と医療チームをつくり地域の人々や心に近い存在になりたい。
⑦	大学生生活をきちんとする。授業に遅れない、時間を守る、当たり前のことをクリアして、体調管理、健康生活に努める。恥のない言動・行動に心がけ、凡事徹底で看護師になる。	高齢化の進展で地域看護の必要性が増している。地域に住んでいるあらゆる年代の人、集団や組織に健康増進の支援を行う必要がある。患者の退院後も多職種連携で係わる。地域全体に寄り添える看護師になりたい。
付記・この決意については記載した学生の承諾を得て掲載するものである。		

の法文・経済・法・理・工学部生などはここまで将来の方向性が１回生のこの頃には，これほどしっかりと決まっていない場合が多い．看護専門職は大学生から社会人となっても，次々と新たな専門知識を習得しながら進んでいかなければならない．もう少し筆者が驚嘆するような意外なことを書いてほしいと望むのは欲なのであろうか．

（2）看護専門職の複雑性こそが地域で主体的に生きる看護専門職を創り出す

2010年3月，厚生労働省の「チーム医療の推進に関する検討会報告」で「看護師はチーム医療のキーパーソン」と位置づけられた．これは学士卒の看護師も増え，医学を学び豊かな医療・看護臨床を経験蓄積した看護師も増えてきたことや患者と最も多くの時間関わる看護師の立ち位置を背景としているが，すべての看護師がキーパーソンになれるのではなく「チーム医療の要になるのは優秀な実力のある看護師（日野原重明，2015）」である．

さらに，看護師は地域包括ケアのキーパーソンともいわれている．それは，病院完結型から地域完結型の医療・介護にシフトしていく時代背景の中で医療依存度が高い高齢者の在宅生活を支えることの出来るのは「病気のことも，薬のことも，その方の身体のことも理解していて，他職種ともつなぐことができて，患者の生活にとても近いところにいるのは看護師である（齋藤訓子，2013）」と早くから指摘されてきている．病院内においても地域においてもその存在力が期待される看護師に向けて私たち看護師教育機関の使命感も高まらざるを得ない．

さて，「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」には「人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として幅広く理解する能力を養う．」などの７項目が掲げられているが，2018年6月に日本看護系大学協議会が発刊した『看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標』にはⅠ群「対象となる人を全人的に捉える基本能力」では「看護の対象となる人と健康を包括的に理解する基本能力，人間を生物学的に理解しアセスメントに活かす基本能力，人間を生活者として理解しアセスメントに活かす基本能力，人間を取り巻く環境について理解しアセスメントに活かす基本能力」四つの能力が挙げられているが，あと，Ⅱ群「ヒューマンケアの基本に関する実践能力，Ⅲ群「根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」Ⅳ群「特定の健康課題に対応する実践能力Ⅴ群「多様なケア環境とチーム体制に関する実践能力」Ⅵ群「専門職として研鑽し続ける基本能力」の計６群25項目の能力を卒業までに身に着けるとしている．25項目は「する・活かす・させる・図る」能力なのである．学士課程修了後すぐに命に関わる現場に出ていく学生たちへの切なる思いと送り出す教員たちに向けた「これでどうだ」という内容であり，他の専門分野や他の社会団体に向けた看護学教育分野の決意表明ともうかがえる．

実習を含めて25項目の能力は４年間で身につけさせ得るのだろうか．看護現場実習による臨床経験をいくら経験させたとしても実際に就職して，いざ本番となるとその責任の重さに打ちひしがれそうになるものである．これら25項目はあくまで基本となる実践に向けた能力を引き出す25の宝の箱として持たせるものではなかろうか．パトリシア・ベナーは臨床看護実践の熟達レベルを初心者，新人，一人前，中堅および達人の５段階に分類しているが，卒業生が25の宝の箱と現場で直面する状況をうまくつないで箱の中身をどれほど豊かに臨床体験の積み重ねにより試行錯誤しながら達人に向けて自己編集していけるのかは，それぞれの看護師の絶えざる自律的主体的営みにかかっている．主体的に判断して対応できる頃に箱はしっかりと自分のものになるのだろう．

（3）非論理世界こそが看護専門職の地域で生きる醍醐味

看護学専門外の筆者としては，ここに書かれた25項目を実現させるための処方として，学びの「楽しさ」「面白さ」「わくわく感」「希望」「信念」「共感」「切実さ」ではなかろうか．これらは合理的に説明できない非論理的世界だから到達目標文書にはほとんど書かれていないのだが，「人間の重要な部分は非論理的なものに包まれている（内山節，2006）」とする論者も多い．

しかし，この非論理的世界こそが看護ケアの最大の特徴であり優れた点ではなかろうか．デカルト以来の分析科学を克服するための「臨床の知」「経験知」「実践知」の世界．まさに豊かな暗黙知と形式知の相互作用による知識変換がさらなる素晴らしい暗黙知と形式知を生み出し続ける．看護の知は豊かな暗黙知（経験知），すなわち非論理的世界にも豊かに彩られながら熟達化するのである．ならば，到達文書にもっと取り入れられてしかるべきではなかろうか．筆者が「地域で主体的に生きる」論理での一つの到達点が暗黙知を重視する知識経営論であったが，その経営論には非論理世界の用語に満ち満ちている．知識経営論の医療看護分野への適用は梅本勝博，佐藤紀子，吉浜文洋等により論じられているがまだしもの感は否めない．

「看護行為がテキストによって表現されるとき・・アートの要素を含めて記述するのは大変難しい．看護師の状況にふさわしい立ち位置，姿勢の美しさや動きの滑らかさなどは，援助を受ける側の気持ちに配慮した言葉かけやしぐさなど，技術のテキストのなかでは，ほとんど余計な情報になってしまいます．（川原由佳里，2013）」と指摘されるように，看護師のアートの世界は暗黙知に満ち溢れていて，その全てを記述伝達することは不可能なのである．

地域づくりにおけるリーダーであれ，ものづくりの技能労働者であれ，熟達した技は数値的論理的に継承することは困難である．現場で見て感じとるしか術はないのかもし

れない．看護の価値を「見える化」する努力の積み重ねも大切ではあるが，どこまで行ってもすべてを「見える化」することはできないのである．

地域で主体的に生きる看護専門職とは，まずは一人の地域人として主体的に生きるとはどうなのかを考え，次に看護専門職として地域に何が出来るかを考え，さらに看護専門職として，自らの職場と地域にナーシング出来る存在である．

今日，ケアは国民すべてが身につける必要のある能力である．家庭で，職場で，家庭や職場を含む地域でケアは必要である．看護専門職はケアの専門職であり，ケアのプロである．地域にあってケアの先導師である．

2020年はフローレンス・ナイチンゲール生誕200年であった．彼女はクリミアの戦傷病者のケアを通じて「生きる希望」を与えた．故国に帰り家族と再会できるという希望と生きがいである．希望と生きがいこそが自然治癒力を高める最高の薬なのである．彼女が最も頼りにしていたハーバード卿亡きあと悲嘆に暮れていたときに手を差し伸べたのはクリミアの兵士たち．兵士たちの差し出す浄財でナイチンゲール基金が生まれ世界最初の看護師養成学校ができた．彼女が亡くなったときに彼女の棺を担いだのもクリミアの兵士であった．

ケアの力は偉大であり，人を動かし，時として歴史をつくる．ケアは家庭の希望，職場の希望，地域の希望を創り出すのではないかと考えられる．その地域のケアの中心に看護専門職がいるのではなかろうか．

近年では「地域に飛び出す公務員」とか「コミュニティナース」が登場してきているが，この現象は対象である住民の生活実感を取り戻さなければ公務員や看護師の自己の存在確認さえできない状況と，役所や医療機関内部にとどまる思考では解決できない諸課題が増えてきている状況を反映しているのである．

市職員時代，研究者時代を通じて，いつも地域に飛び出してきた筆者からすると「地域に飛び出さないのはもともと公務員でありえない」と考えるのだが組織内（の机・地位）に逃げ込み劣化した感性の復権宣言だと思われる．あえて「地域に飛び出す」と言わざるを得ないところに公務員の住民生活感覚との乖離が顕著に生じているのである．コミュニティナースは島根県雲南市の看護師・矢田明子さんが始めたNursing活動で，看護師の専門的知見でまちや地域を元気にする繋ぎ手である．愛媛県内では久万高原町の看護師・高田弘美が先進的に取り組んできており，さらに愛媛県内，四国内のネットワーク構築に取り組んでいる．病院から地域を見るのではなく地域から病院を見るとどうなるのか．生活者の具体的総合的理解からのNursingである．2022年度には松山看護学部の在宅・地域看護学科目の実習生を受け入れている．

今日，家庭や市場取引では解決できない諸問題が個人に，地域に，社会に，組織に噴出し続けているが，筆者の考えるその解決プロセスの原型を「天使のプロセス」として**図⑥**として掲げておく．実現が困難で崇高性を帯びているから「天使」のプロセスなのである．「パッションからミッションへ」が合言葉である．

今日の地域には市場取引すなわち経済では解決できない課題に満ち溢れている．とくに医療・看護の分野は，いのちのやりとりの世界である．「医療を経済に合わせるのではなく，経済を医療にあわせるのが，社会的共通資本としての医療を考えるときの基本的視点である．（宇沢弘文，2015）」．コロナ禍を経て，超高齢化社会を迎える地域で「いのちのやりとり」に関わる看護師の自立的活動に向けた時代の要請はますます強まってきているのである．

文　献

日野原重明（2015）．チーム医療における，看護師の新しい役割，井村裕夫，医と人間（162–171）．東京：岩波書店．

川原由佳里（2013）．看護の知．東京：看護の科学社．

近畿クリニカルパス研究会・梅本勝博（2003）．医療・福祉のナレッジ・マネジメント．名古屋市：日総研出版．

岡谷恵子，中西純子，松本陽子，林優子，田倉智之，内布敦子（2012）．社会に向けた看護の価値の可視化．日本看護科学学会誌，32（2），94–97.

佐藤紀子（2007）．看護師の臨床の知．東京：医学書院．

椎川忍，牧慎太郎，澤田史朗，野崎伸一，井上貴至，前神有里，後藤好邦，吉弘拓生（2021）．飛び出す！公務員．京都市：学芸出版社．

矢田明子（2019）．コミュニティナース - まちを元気にする“おせっかい”焼きの看護師．東京：木楽舎．

吉浜文洋（2016）．看護技術論の新たな展開に向けて．佛教大学保健医療技術学部論集，10.

内山節（2006）．地域の作法から．東京：農山漁村文化協会．

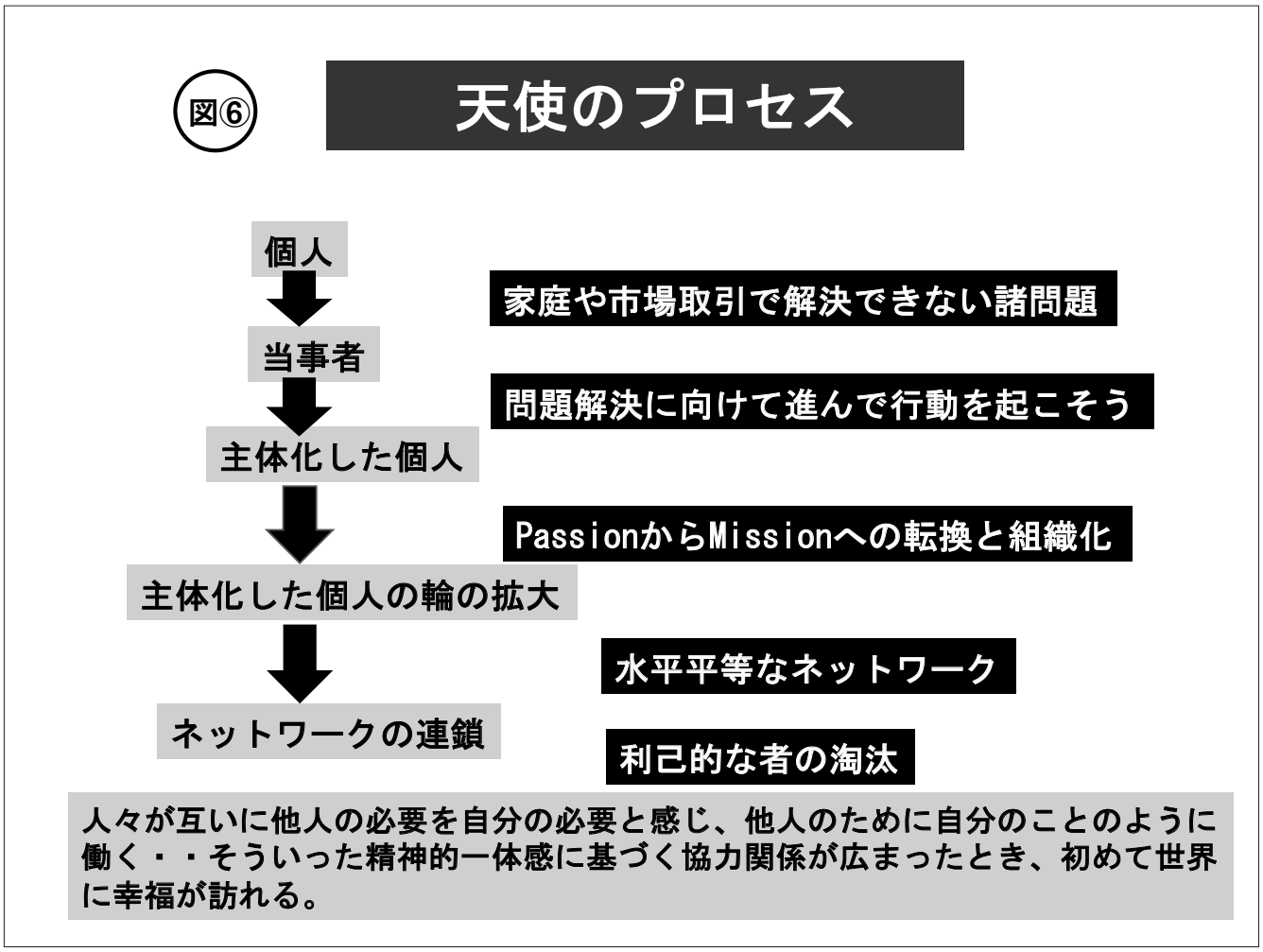
梅本勝博（2004）．医療のナレッジ・マネジメント．病院．63,198–204.

宇沢弘文（2015）．宇沢弘文の経済学．東京：日本経済新聞出版社．

結　語

１回生前期基礎科目「愛媛を学ぶ」の講義担当教員として，愛媛をガイダンス的に講義する表層に各コマと全体に「地域で主体的に生きる」ことを血脈として流し込んだ講義をしていることの背景を私の50年間の「地域で主体的に生きる」ことを選択し，今日まで継続的に取り組み，試行錯誤してきたことをリフレクションとしてまとめ，「地域で主体的に生きる」ことを考察し，その上で「地域で主体的に生きる」看護専門職の創出を考察した．

伸縮自在の地域との係りで，自己の存在位置を確認しながら，制度によって限りなく分断された地域住民を主体回復のために包括的統合見ながら，地域再生を行う場，多様



な主体が知的で，居心地の良い場を自発的につくることが求められている．

大学看護課程の卒業時到達目標では「対象となる人を全人的に捉える基本能力」では「包括的に，生物学的に，生活者として，取り巻く環境を」理解する基本能力を掲げている．まさに，50年間求めてきた私の世界そのものである．看護専門職に課せられたのは，「部分化，人工物，経済主義，環境負荷増大」というまさに近代が追い求めた方向を反転し，他者とのケアから自己をケアしつつ主体的に生きる物語を紡ぎ地域に関わっていくことが求められているのである．

（追記　なお，松山看護学部1回生選択基礎科目で講義担当しているもう一つの科目「経営学の基礎」は「組織で主体的に生きる」ことを講義目標としている．）